

3 外来血液透析患者の在宅におけるフットケアの実態調査

長野医療生活協同組合長野中央病院血液浄化療法センター

○高木なつ子 丸山洋子 山本秀子 血液浄化療法センター一同 臨床工学科一同

I. はじめに

近年、日本の高齢化に伴い透析患者の高齢化も進んでいる。平成 15 年度、厚生労働省は高齢者の自立した生活を送るための支援として「介護予防 地域支えあい事業」の中に「足指、爪のケアに関する事業 フットケア」を位置付けている。熊田は 1) 医療従事者にとっての「フットケア」とは、「少しでも長く歩ける足を護り、足から全身を診ること」とあり、さらに健常人では足白癬、陥入爪で足を失うことはないが糖尿病、下肢閉塞性動脈硬化症に罹患していたり高齢者では些細な足の傷で足を失いかねない。まして透析患者は足病変のハイリスクグループであり足病変を予防していくには患者自身が足に対する病識を持つように教育することが重要と述べている。その予防と患者教育により糖尿病患者の足病変による下肢切断の比率を 49～85%削減できるとも言われている。当センターでのフットケアは患者全員（入院患者含む）に月 1 度定期的に足の観察をチェック項目に沿って行っている。問題があれば適宜その場で指導している。始めて 5 年が経過しているが、足病変の予防と早期発見、早期治療を目的として行っているフットケアが患者の足の自己管理に繋がっているのか実態を明らかにしたので報告する

II. 研究目的

- ① 患者の足への関心
- ② 患者の足の観察
- ③ 足の病変時職員に相談する。

以上を明らかにする。

III. 用語の操作上の定義

1. 足病変

傷・水疱・皮膚爪の色・むくみ・魚の目・たこ・乾燥・水虫・冷感・つまめ周囲炎・しびれ

高木なつ子 長野中央病院 血液浄化療法センター

〒380-0814 長野市西鶴賀 1570 026-234-3211 (内 1560)

2. フットケア

当センターの観察及び聞き取り項目（浮腫・創傷・冷感・足背動脈の拍動触知・しびれ・白癬・痛み・巻き爪）に沿った必要な生活指導を行う。

当センターのフットケアの基準

1 月に 1 度施行

観察項目

- ・ 足と指間の観察
- 傷、発疹の有無、乾燥の具合
- ・ 冷感の有無
- ・ 痺れの有無
- ・ 足の痛みの有無（安静時・運動時）
- ・ タコ、魚の目、まめ、靴ずれの有無
- ・ タコ、魚の目を自分で削っていないか。
- ・ 乾燥によるひび割れの有無
- ・ 水虫の有無
- ・ 爪の状態の観察（厚み、硬さなど）
- ・ 血糖コントロールの状態
- ・ 清潔に保たれているか。
- ・ 浮腫の有無
- ・ 足背動脈触知の有無
- ・ 足を締め付けている衣類を身につけている。
- ・ ときどき足にやけどをすることがあるか
- ・ 靴の中の小石に気づかないことがあるか
- ・ すでにある傷は処置し HD 毎に観察する。

実施後の管理

- ・ 必要事項をカルテに入力する。
- ・ 観察の継続が必要であれば青字で入力する
- ・ 足の傷出血があった場合、カンファレンスで報告、緊急性があれば医師に報告指示を仰ぐ

IV. 研究方法

1. 調査期間

平成 17 年 7 月 12 日～14 日

2. 調査対象

当血液浄化療法センターに通院中の患者 89 名。

3. 調査方法

質問紙調査(留め置き法) 一部聞き取り調査。

4. 倫理的配慮

対象者には文書で研究の趣旨を説明する(アンケート用紙に添付)研究以外でデータを使用しないことを約束し調査協力を得る。
プライバシーの保護、心身の配慮に務める。

V. 結果

調査用紙の回収数は 80 名(90%)。
対象者の属性は平均年齢 66 歳(31~96)
平均透析暦 4.9 年 (1~23)。

- あなたは糖尿病と診断されていますかの問いでは「はい」「いいえ」ともに (39 名) 49% であった。(図 1)
- 「足への関心」では「関心がある」と回答した患者は 71 名 (88%) であり、「関心がない」は 7 名 (9%) 「無回答」は 2 名 (3%) だった。
「足の観察」では「観察をしている」と回答した患者は 74 名 (92%) 「観察をしていない」は 6 名 (8%) だった。(図 2)
- 「足の観察をしている理由」は複数回答で「糖尿病があるから」22 名「足を診るよう言われているから」21 名「足のトラブルがあったため」13 名「足の血流が悪いと言われているから」が 10 名だった。(図 3)
- 「足の観察をしていない理由」では「足のトラブルがなかったから」が 6 名中 5 名、「無回答」1 名だった。(図 4)
- 「いつ観察をしているか」では複数回答で「毎日足の観察をしている」が 30 名、「入浴時」26 名、「爪きり時」20 名、「靴下を履く時」17 名、であった。(図 5)
- 「何に注意して観察しているか」では複数回答で「むくみ」と回答した患者は 50 名。「趾間の皮膚状態」27 名、「爪ののび」26 名、「傷」21 名、「水虫」「冷感」「爪周囲」が 15 名、「皮膚の色」10 名、「たこ」7 名、「皮膚乾燥」7 名、「水泡」6 名、「魚の目」5 名、「痺れ」1 名だった。(図 6)
- 「足のトラブル時に職員に相談した病変、相談しなかった病変」では「相談した足病変」は「むくみ」15 名、「水虫」11 名、「冷感」6 名、「傷」5 名、「たこ」「爪の色が不良」が 4 名、「皮膚の色の不良」「爪周囲の赤み」が 2 名、「ひびわれ」1 名であった。
次に「相談しなかった足病変」は「むくみ」

図 1

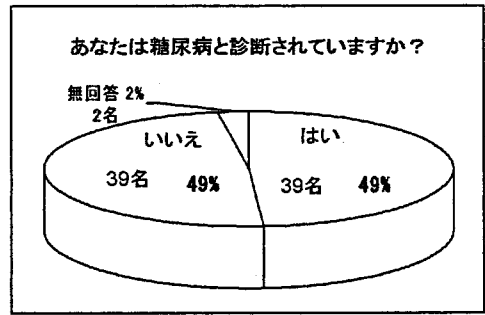


図 2

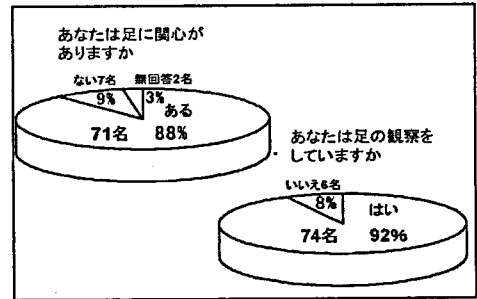


図 3

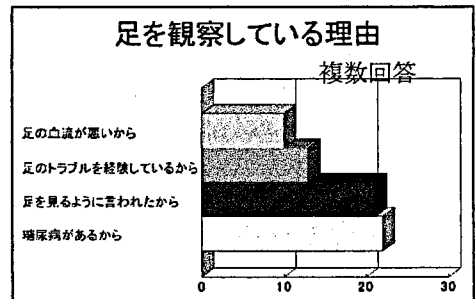
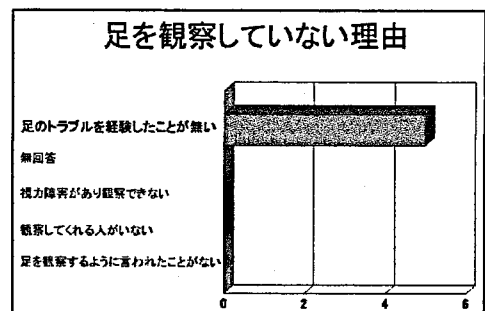


図 4



12名「水虫」「爪の色の不良」6名、「たこ」「冷感」が5名、「皮膚の色の不良」「ひびわれ」「魚の目」が3名、「水泡」「爪周囲の赤み」は0名だった。(図7)

8.「あなたは視力障害があるか」では「ある」と回答した患者は42名(53%)「ない」は37名(46%)だった。(図8)

9.「誰が観察しているか」では、「自分でやっている」と回答した患者は61名(82%)だった。(図9)

10.「爪切りは誰が行っているか」では、「自分」と回答した患者は61名(76%)だった。(図10)

VI考察

諸外国で靴を履く歴史が長い国では、フットケアに対する歴史も長く、健康管理の1つとしてフットケアの重要性が認識されており専門家によるフットケア教育が行われている。足病変の予防と重症化防止のためには患者教育が重要であることは知られている。日本における糖尿病患者への教育活動に関する調査では、フットケア教育は実施割合が低く、計画に基いた教育や評価が少ないと報告されている。4) 今回の調査では患者の病識の度合いは調査をしていないがアンケートの結果49%の患者が、自身は糖尿病であることを認識し(当センターでの糖尿病原疾患率は48%である)そのうち53%が「足を診る理由」に糖尿病があるからと答えている。このことから患者は糖尿病により足病変が起こる可能性があることを認識しているのではないかと推測される。

糖尿病の下肢切断の85%は足潰瘍が先行するといわれ、さらに維持透析患者においては病態が重症化しやすい傾向にあり足病変の治療は難渋する。患者の自立した生活及びQOLを守るために必要な足を護るには、特別な準備は必要なく「足を診る」ことから始まり、それには医療従事者側が積極的に足を観察する機会を作り患者がフットケアに対する知識を持ち実践できるように教育することが重要と熊田は述べている。1)

当センターの2006.1~12月までの足病変のまとめは白癬10名、骨折1名、靴擦れによる皮むけ2名、外傷1名、爪周囲炎1名、水泡1名である。切断、壊疽、潰瘍に至る患者はいなかった。

毎月定期的に行っているフットケアは透析前の短時間ではあるが、患者に靴下を脱いでもらい、

図5

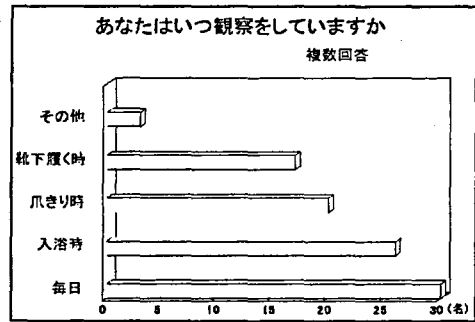


図6

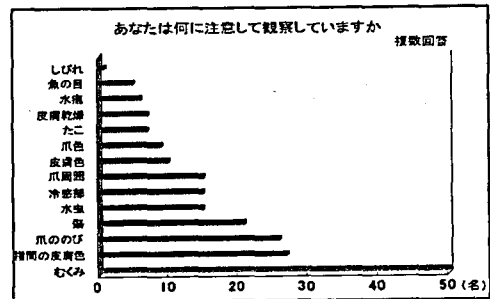


図7

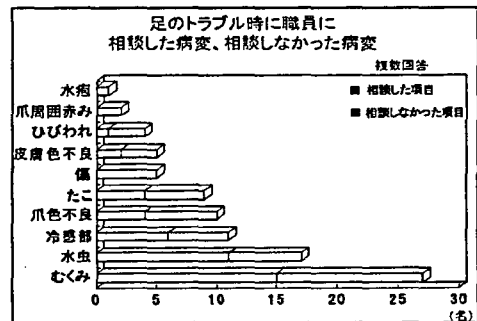
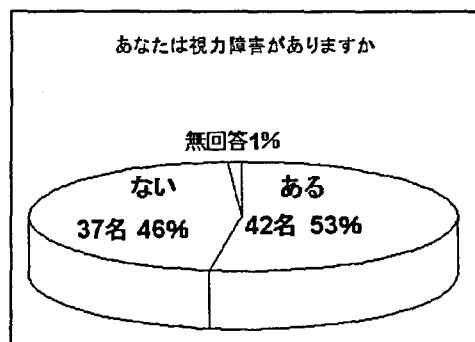


図8



足を診て触る、基準の整備による指導の統一化もされている。この調査で、9割の患者が足に関心があり観察している。足病変時には8割の患者が職員に相談できている。足の観察をしながら患者とのコミュニケーションの中で患者も観察のポイントと異常時には相談する事の重要性を学んでいるのではないかと考察することができる。

また、「何に注意して観察してるか」ではむくみが多かったが、これは原因として体重増加に伴い浮腫みの経験があるため多かったと考えられる。しかし浮腫みは、脈管系の循環動態の変化で起こり重要な観察項目でもある。足の観察のポイントや「いつ観察をしているか」の回答から、観察のタイミングは、それぞれタイムリーにできていることがわかった。

課題として上げられることは、視力障害がありながら足の観察を自分でやっている患者が80%であり、さらに視力障害がありながら自分で爪を切っている患者が69%だった。この事は視力障害がありながら自分で爪を切ることの危険性を認識していないのか、援助者がいないのか今回の調査では明らかにできなかったが、今後、情報収集を含めた対策を講じる必要があると考えた。以上課題は残るが、定期的に行われているフットケアは患者の足への自己管理につながっていると考察できる。

VII. 結論

1. 足への関心は9割近くの患者がもっていた。
 2. 足の観察は9割の患者が行っていた。
 3. 足病変時8割の患者が職員に相談していた。
- 以上のことから定期的に行われるフットケアは患者の自己管理につながっていると考えられる。

VIII. 課題

視力障害のある患者のフットケアは社会支援も考慮し検討をしていく必要がある。

図9

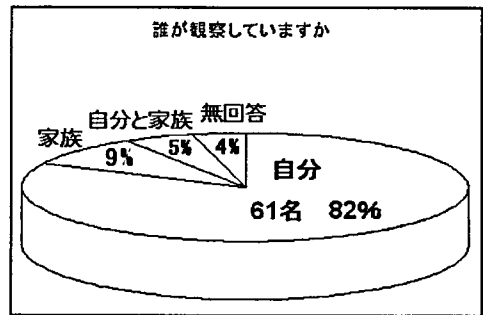
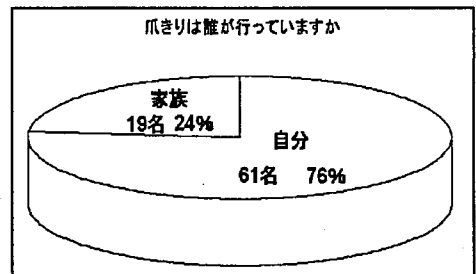


図10



引用参考文献

- 1) フットケアの意義、予防効果のヒ・テ・ス 月刊 NurseData Vol.26No.2 3
- 2) フットケアはなぜ重要か 臨床看護第31巻第9号 2005年8月
- 3) 糖尿病足病変に関する国際ワーキンググループ. 編 インターナショナルコンセンサス 糖尿病足病変 医歯薬出版、東京2000
- 4) フットケアをきわめる 臨床看護1 特集 2007年1月号 へるす出版